



I-OWA 創業 10 周年記念講演(要約) 薩摩スチューデントの志

講演: 林 望 氏

レポーター: 赤堀 薫里

明治維新という国家の大革新について学校で習う歴史では、薩摩スチューデントはほとんど知られておらず過小評価されています。1865年に薩摩スチューデント15人と、4人の外国使節団、総勢19名が国禁を犯し、極秘で薩摩藩の藩費でイギリスに留学並びに外交折衝に渡りました。その前年、長州は、後に長州ファイブとも言われる伊藤博文、志道聞多(井上聞多、のちの井上馨)等5人がイギリスに渡りました。

通俗のジャーナリズムの世界では、長州ファイブが明治維新をリードしたかのような印象が定着しており、長州ファイブは映画化もされています。しかし、薩摩スチューデントはいっこうに映画化もされません。今年がちょうど薩摩スチューデントの渡航150年記念の年である為、是非、大河ドラマに取り上げてもらいたいと、鹿児島県知事を始め様々な方々に働きかけをしましたが叶わず、依然として薩摩スチューデントについては過小評価のままです。私が歴史的な現実を調べたところ、明治維新政府は、薩摩スチューデントが居なければ恐らく失敗していたでしょう。

例えば、明治政府は秩禄買い上げのためのお金が無いため、欧米で外債発行による資金調達を行い、秩禄を買い上げました。それをしたのは、薩摩スチューデントの一人、吉田巳二です。彼はイギリスで学んだ後、渡米、クリスチャンになり米国の大学で学びます。この人が明治政府の財務方面の知恵袋でした。

この時、彼は外債をアメリカで公募しようとしたのですが、薩摩スチューデントの仲間であり、米国の少弁務使だった森有礼から断固たる反対を受けそれをあきらめています。その後、イギリスに渡り外債公募に成功し、これをもって明治政府は秩禄を買い上げます。もしこれがなかったら、明





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

治政府は経済的に破綻をきたしていたことは明白でした。

明治政府の教育文化方面でいうと、東京大学の前進である東京開成学校の初代校長である畠山義成、また、現在の東京国立博物館の前進である東京博物館の初代館長町田久成、皆さんご存知のサッポロビールを作った村橋久成もみな薩摩スチューデントのメンバーです。その他、松村淳蔵は海軍や軍事建築を学んだ後、帰国し、日本海軍の草創期に非常に大きな功績を残し、後に海軍兵学校長になります。森有礼は、初代の文部卿となり、寺島宗則は、初代の外務卿になります。彼らも全員薩摩スチューデントです。薩摩スチューデントの中で最年少、長沢鼎、本名磯永彦輔は当時、13歳でしたが、後にカリフォルニアに渡りカリフォルニア・ワインを成功させ、世界的な活動をしました。ですから、薩摩スチューデントをもっと正当に評価しないと、明治維新の根本を理解していないことになるでしょう。

この後、薩摩スチューデントが、イギリスから近代国家になるための要素を学んだことや、日本ではいがみ合っていた薩摩藩と長州藩が、遠いロンドンでは日本における薩長連合に先んじて交友関係が出来上がっていたこと。これらは数少ない例ですが明治政府の中で、外交・教育・海軍などすべての分野で薩摩スチューデントは大きな貢献をしました。その点でも、彼等のことはもっともっと維新の大変革の中でいかに大きな働きをしたのか再評価されるべきです。多数の貴重な写真を交えて林望氏の薩摩スチューデントに対する熱い思いを伺いました。(文責:I-OWA)

